

### 【お願い】

この小説は金目によるフィクションであり、現実に存在する個人・団体などとは無関係です。

無断転載・私的利用の範囲を超えた共有など、著作権法に触れる行為は控えていただきますようお願いいたします。

この作品は犯罪行為を推奨するものではありません。フィクションとして、お楽しみください。

作中の性行為描写はすべてファンタジーとなります。現実のセックスへの参考になさらないようお願いいたします。

## 登場人物

### 安藤 剣太 (あんどう けんた)

男。大学生。トライアスロン部。

己の益荒男男根に自信を持っている。

平常時 11.7 センチ、勃起時 25.3 センチの半剥けデカチン。左の玉の方が大きい。

### 高倉 (たかくら)

男。大学生。剣太のルームメイト。

### 新岡

### 和田

剣太の隣の部屋の寮生。

## 第一話

「お前、なにポコチンブラブラさせてるんだよ」

「仕方ないだろ、着替えを忘れたのに気がついたのが風呂から出た後なんだからよ」  
ルームメイトの高倉に指を刺された安藤剣太は腰に手を当てて腰を前後に動かした。  
その動きに合わせて剣太の股間にぶら下がる人並み外れた男根がぶるると震えた。

「だからって、タオルぐらい巻いておけよ」

「そうさそうさ、見苦しいナニを見せてるんじゃないよ」

隣室の新岡と和田が剣太の首にかかったバスタオルを指さした。

「男同士なんだし、堅苦しいこと言うなよな」

剣太は床に座ると高倉たちがテーブルに広げていたビールに口をつけた。

「剣太さあ、お前、全裸で風呂からこの部屋まで歩いたのか？」

「そうだけ。」

風呂に入る前に服を全部洗濯機に入れたからな、タオルしかないわけ」

「恥ずかしいとか思わねえの？」

「男同士だし、俺の身体に恥ずかしいところはないしな」

高倉の指摘に剣太は笑顔で首を振った。

トライアスロン部に所属する剣太の肉体はアスリート特有の凄味を備えている。

そして、剣太の顔は精悍な男そのものであり、肉体と顔に恵まれていることは間違いがなかった。

その上、剣太は男根にも恵まれていた。

平常時 11.7センチメートルの男根は亀頭の半分ほどが皮に覆われてはいるものの、並の男を寄せ付けぬ雄の魅力に溢れており、顔、肉体と合わせて同性の羨望の眼差しを集めるものであった。

剣太は己の男根が羨望の的であることを自覚しており、そして、それを誇りに思っていた。

普段の下着はもっこりが強調されるビキニパンツであるし、風呂でも腰にタオルは巻かず、見せつけており、トライアスロン部やこの男子寮でも男根を見せつけることが多かったし、宴会ではためらいなく全裸になれるほどに、己の身体に自信があった。

「ばっか、お前。」

皮被ったポコチンで恥ずかしくないとか自意識過剰じゃん」

新岡が剣太の男根を指さして笑った。

「俺がずる剥けだったらお前、完璧すぎて神に怒られるわ」

剣太の言葉に新岡がゲラゲラと笑い出した。

「じゃあ、剣太のポコチンにかんぱーい」

高倉の言葉に合わせて剣太たちはビールを手にとって打ち付けあった。

「そういえば、男も潮を噴けるって知ってるか？」

自室での宴会が盛り上がってきたころ、高倉がおかしなことを言い出した。

「ああ、聞いたことがある。

男も潮を噴くんだってな」

その言葉に和田が頷いた。

「お前ら、マジで言ってんのか？」

剣太は高倉と和田に疑念の眼差しを向けた。

剣太にとって潮噴きとは女性特有の性現象であり、感極まった女性が噴くものだったからだ。

大体、男には膣もないのにどこから噴くのだろうか。

まさか、尻か。

剣太は尻から潮を噴出する男を想像して笑い出した。

「あ、剣太。

お前、馬鹿にしてるだろ？」

高倉が剣太を指さした。

「だってよー。

男がどこから潮を噴くんだよ。

尻か？

お前もそう思うよな、新岡」

剣太が新岡に話を振ると、新岡が首を振った。

「頭ごなしに否定をするのもどうかと思うぞ」

「いやいや、あり得ない。

あり得ないからな。

男が発射するのはザーメンだろ？

そんな、女じゃあるまいし」

剣太は高倉たちの顔を見て笑い続けた。

「じゃあ、お前は、潮なんか噴かないんだな」

高倉がおかしな目つきで剣太に尋ねてきた。

「ああ、ああ、間違いない。

男は、いや、俺は潮なんか噴かないぜ。

見ての通り、グレイトな男だからな。

そんな女みたいな真似、間違ってもできないぜ」

剣太は己の男根を指だして堂々と断言した。

「なるほどな」

高倉の言葉に合わせて、新岡と和田が立ちあがった。

そして、剣太に近づくと、剣太を押し倒した。

「きゃー、襲われちゃうー。

レイプされちゃうわー」

酔いが回っていたこともあり、押し倒された剣太は女の子になったつもりで裏声を上げてわざとらしく首を振った。

だが、新岡が剣太の両手を押さえ、和田が剣太の足の上に乗って完全に動きを押さえたところで、何かおかしい、と気が付いた。

「え？ ちょっと、マジ？

マジで襲われちゃう流れ？」

剣太の言葉に高倉がにやりと笑った。

「俺らは潮噴き肯定派。

お前だけは否定派だろ？

だったら、お前の身体で男は潮噴きなんかしないって証明しないとな」

高倉の言葉に新岡と和田が力強く頷いた。

「え？ マジ？

お前ら酔っぱらってるだろ？

なあ、ちょっと、マジで止めろよ」

「やめねーよ、デカチン剣太」

和田が剣太の男根を摘まみ、皮を剥いた。

仮性包茎のため、剣太の包皮は雁首の高い亀頭の根元に留まった。

和田が剣太の亀頭に親指を押し付け、ぐりぐりと刺激をし始めた。

「え？ マジ？

ちょ、ホモられちゃうの、俺？」

人並外れた男根が自慢の剣太は、男に男根を弄られる経験が何度かあった。

だから、剣太はこの事態について、まだ悪ふざけの範囲内だと思っていた。

剣太は顔、肉体、男根において優れた男であり、まさか自分が男の性的な対象になるだろうとは思ってもいなかった。

「そうだな。

お前は潮を噴いて女の子にされるんだ」

だから、和田が鋭い目つきで告げられた剣太は、そこで初めて危機感を覚えた。

「ちょ、待てよ。

冗談じゃねえよ！」

剣太は慌てて両手足を動かそうとしたが、新岡と和田もアスリートであり、先に両手足を押しえられた以上この状況を覆すことは無理な相談だった。

和田は剣太の亀頭を指でぐりぐりと刺激していく。

「くっそ！

誰か！ おい、誰か来てくれ！」

剣太は部屋の外に向かって叫ぶが、誰も来ない。

剣太たちが部屋で宴会をすることは周囲の人間の知るところであり、普段、悪ふざけをしていることもあり、周囲の寮生は剣太が本気で助けを求めているなどとは思ってもいなかったのだ。

和田が剣太の亀頭を愛撫していく。

和田の手の中で剣太の男根がむくむくと大きくなっていく。

剣太は、不本意ながら感じてしまっている己を自覚していた。

己の手で快楽をコントロールできる自慰と違い、他人の手で愛撫されると思い通りにならない分、快楽が高まるなどとは剣太は知らなかった。

だが、和田の手で愛撫されて感じているなどとは認めたくなくて、剣太は歯を食いしば

って快楽を拒む姿勢を示した。

「そんな顔をしてしても無駄だぞ。

お前のポコチンが、お前が感じていることを証明しているからな」

和田の言葉通り、剣太の男根は和田の大きな手から余るほどに大きく太くなっていた。

和田が剣太の男根への愛撫を続ける。

剣太の口からうめき声が漏れ出す。

やがて剣太の男根が完全に勃起した。

そのうち女を知ることになると楽観していた男根を男の手で弄ばれたことに剣太はショックを受けていた。

しかも、気の置けない仲である高倉たちの手だ。

和田はそんな剣太の心のうちなど興味がない様子で剣太のフル勃起益荒男男根を己の手元に引っ張った。

勃起角度の高さも自慢の男根を足の方向に押し倒された剣太は根元に痛みに顔をしかめた。

ビタン！

和田が手を離すと、反動で剣太の益荒男男根が勢いよく剣太の引き締まった腹筋にぶつかった。

和田が再び剣太の益荒男男根を押し倒した。

ビタン！

和田は三回、剣太の益荒男男根の反動で遊んだ。

悪ふざけの域を超えた辱めに剣太の顔は真っ赤になった。

「まだまだお楽しみはこれからさ」

これまで手を出していなかった高倉が剣太の腹に空になったビール缶を置いた。

剣太の益荒男男根は 25.3 センチメートル。

ビール缶の高さよりも長かった。

カシャ！

シャッター音に驚いて剣太は高倉に顔を向けた。

高倉がスマートフォンで剣太の画像を撮影したのだ。

「高倉、あとで転送してくれ」

「俺にも頼む」

「任せろ」

新岡と和田の言葉に高倉が頷いた。

「ちょっと待てよ。

写真は反則だろ？」

「恥ずかしい身体じゃないんだろ？」

いいじゃん。ご立派でさ」

高倉が剣太の抗議に耳も貸さずにスマートフォンを操作する。

怖い。

剣太は初めて恐ろしさを覚えた。

恥ずかしいだけではない。

身の危険を真剣に感じたのだ。

「んじゃ、潮を噴かせてやれよ」

高倉の言葉に和田が剣太の益荒男男根をゆっくりと上から下へ抜き始めた。

「止めろ！　止めろって！

マジで！　くああ！　止めろよ！」

剣太は必死に両手足を動かそうとするがアスリートの新岡と和田に押さえ込まれた剣太には抵抗する手段がない。

剣太の顔が紅潮し、口から怒りに混じって淫らな息が漏れ出した。

和田の手が徐々に早まる。

剣太の全身がビクビクと震えはじめた。

剣太の下腹部が熱くなってきた。

射精してしまう！

剣太は男の手で導かれる射精におぞましさを感じた。

剣太もこういう性格なので、高倉たちとアダルト動画を見ながら射精の見せ合いをしたこともある。

だが、自分の手で射精をするのと、他人に弄ばれて射精をするのでは、自尊心の問題で快樂の質が大きく変わるだなんて、今日まで分からなかった。

必死に歯を食いしばる剣太の口から涎が零れ始めた。

剣太の息が荒くなる。

剣太の腰が浮き上がる。

25.3センチメートルの益荒男男根を勢いよく精液がせり上がっていく。

剣太の息がますます荒くなる。

「うあああ！」

ドピュピュピュ！

堪えきれずに声を漏らしたのと同時に、剣太の益荒男男根から精液が撃ち出された。

勢いよく撃ち出された精液が剣太の顎、喉ぼとけ、顔や胸板に撃ちつけられる。

気持ちよかった……

剣太はそう感じた。

自分の手で射精をするよりもはるかに気持ちがよかった。

和田の手が剣太の長い益荒男男根を根元から親指で抜き上げる。

にゆるりと鈴口から、尿道内に残った精液が押し出された。

剣太は、はあ、と息を吐いた。

そして、己が快樂を享受した事実に驚いた。

いや、待てよ！

男だぞ、俺は！

どうして、男にいいようにされて、気持ちよかったなんて、感慨に耽れるんだよ！

剣太は慌てて新岡たちの拘束を振り払おうとした。

だが、新岡も和田も剣太を解放する気配がない。

「残念。

これからが本番なんだな」

高倉の言葉に和田が剣太の亀頭に親指を押し当てた。

「え？ マジか？

よせ、ぐああ、うひやあああああああ！」

射精したばかりで敏感になった亀頭を容赦なく指で擦られて剣太は情けない声を上げた。

こんな辱めは初めてだ。

立派な男根の割に性欲は人並みの剣太は連続射精の経験などない。

だから、和田の手による亀頭責めは未知の領域だったのだ。

「ヤバい！ ヤバ！ あ、ああ、くううううう！」

必死に声を堪えていた最初の射精よりも気持ちよく、恐ろしく、耐えがたく、声を堪える等無理な相談だった。

剣太の全身が抵抗のためではなく、快楽に煽られて淫らに悶え始める。

剣太の下腹部がきゅうきゅうと言い出した。

和田の手がますます責めを激しくする。

亀頭を指で刺激されながら、竿の部分まで扱かれて剣太は初めての快楽に悶えることしかできない。

止めてほしい反面、このまま快楽を享受したらどうなるのか、という気持ちも湧きあがる。

恥ずかしい。

気持ちいい。

おぞましい。

耐えきれない。

イきたくない。

イきたい。

見られたくない。

見られたい。

千々に乱れる己の情欲に翻弄されて剣太は己の本心がどこにあるのか分からなくなる。

剣太は己の全神経が下腹部に集まりつつあるのを自覚した。

快楽に我を忘れてしまうのは初めての自慰以来だ。

「ひ、ひい、ひいひいひい」

剣太の口から情けない声が漏れ出した。

剣太の下腹部が張り詰めていく。

漏れる！

漏れてしまう！

「もれ！ もれる！

止めて！」

千々に乱れる剣太の心の一部が口から零れた。

和田が力強く頷くと、剣太の亀頭から手を離れた。

解放される安心感と快楽の喪失に剣太の顔が歪んだ。  
だが、和田の手はますます激しく剣太の竿を扱きだした。  
尿道をせり上がる熱いものが恐ろしくて、剣太は言葉にならない声で喚いた。  
ビシャアアアアアアアアア！  
剣太の尿道から透明な液体が勢いよく噴き出した。  
あまりの勢いの良さに剣太は激しく身悶えをする。  
放尿よりも長い噴出。  
射精にも劣らぬ解放感。  
剣太は水揚げされた魚のようにびくびくと震え続けた。  
剣太の益荒男男根から噴き出した雄潮が剣太の全身を濡らしていく。  
勢いあまって上半身を押さえている新岡にも降り注いだ。

しばらくして、剣太の全身からくたっと力が抜けた。  
放心した様子 of 剣太を見て、新岡と和田は剣太の身体を解放した。  
新岡は剣太の雄潮で濡れた服を脱ぎ始めた。  
和田は高倉から手渡されたウェットティッシュで手を拭いだす。  
高倉が剣太の側にしゃがみこんだ。  
「どうだ？」  
これでも男は潮を噴かないとか言わないよな。  
自分の身体で証明したんだしな」  
高倉の言葉に剣太は唇を尖らせた。  
「だからって、ここまですることないだろうがよー」  
気持ちよさと解放からの放心で剣太は強く抗議をしようという発想が浮かばなかった。  
「だって、お前だけじゃん。  
男は潮を噴かないって言ってたの。  
それにお前、ポコチンが自慢なんだし、ポコチン弄られたぐらいどってことないだ  
ろ？」  
「そりゃあ、まあな」  
自慢の男根を褒められて剣太は少しだけ機嫌が直った。  
「じゃあ、まあ、飲みなおそうぜ」  
高倉に絞ったタオルを渡され、剣太は雄潮と精液に塗れた己の身体を拭い始めたのだっ  
た。



## 奥付

『編集版 開けっぴろげ寮生の淫姿開花』より第一話

初出：2022年6月6日

著者：金目

金目の同人活動一覧

【pixiv】

<https://www.pixiv.net/member.php?id=22137005>

【DLsite がるまに】

[https://www.dlsite.com/bl/circle/profile/=/maker\\_id/RG01002299.html](https://www.dlsite.com/bl/circle/profile/=/maker_id/RG01002299.html)

【ゲイ小説進捗状況呟きアカウント】

[https://twitter.com/chigaya\\_deep](https://twitter.com/chigaya_deep)